

照手姫

# 湘南ゾンビG

Shonan  
Zombie

## をぐりさん

式

# 試し読み

足元注意

湘南ゾンビ

Shonan  
Zombie

をぐりさん

式





# 登場人物 その弐



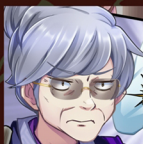
## 大庭楓 (おおば かえで)

伊奈帆の友人。大学卒業を機にNPOを立ち上げ、地域の  
子供食堂を運営している。幼少期の恵美由とも面識があり、  
「てる」は横山家の遠い親戚という事で此処を学び舎にして  
いる。（初登場作品：ナツイロセールトリム）



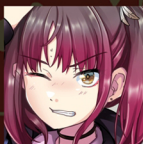
## 大仁田千景 (おおにた ちかげ)

こはぎに「オニカゲ」のあだ名をつけられた陸上部の同級生。  
常に受験を優先して行動している意識高い系。  
時代遅れで向上心のかけらの無いギャルは大嫌い。



## 踊念仏保存会の皆さん

遊行寺で踊念仏の伝承活動をしている檀家の奥様方。  
千景の母方の祖母、池庄司（いけのしょうじ）が代表を務める。  
「遊行の盆」を前に高齢のメンバーが欠けてしまった事で、  
千景に代理を頼もうとした所、口論になってしまう。



## 蔭山乙姫 (かげやま おとひめ)

こはぎたちが渋谷で出会った地雷系女子。  
行方不明になった彼氏を捜しに大阪からはるばる上京して  
きたと言うが……。

# 湘南ゾンビの Shonan Zombie をぐりさん

弐

コツカ

セイル文庫

# 湘南ゾンビのをぐりさん 式

## 目次の事

プロローグ「——うち、踊れるよ?」

四

第一段 盆の道

一〇

第二段 ビジット・ザ・グレイブ

三〇

第三段 踊る大念仏銭

七〇

第四段 習気

八八

第五段 渋谷のビーチで

一二三

第六段 蛇の道は地雷系女子

一五六

第七段 歌舞伎町へようこそ!

一八九

第八段 俊徳丸を捜せ

二〇六

第九段 天王寺

二二四

第一〇段 井好きで好きで仕方なかった

二四五

第一段 善哉なれや、平癒

二六〇

第二段 遊行の盆

二八八

エピローグ 遊行ばやしの夜に

三二二

令和五年某日 これを書きおわんぬ

藤澤てる



この物語は、中世に流行した芸能や作品を題材に虚実織り交ぜ大幅に脚色したものであり、一切の学術的価値は無い。

## プロローグ 「——うち、踊れるよ。」

ご想像いただきたい。もしも寺院の本堂、金色に輝く阿弥陀如来を前にして、突如ギャルが無言でパラパラを舞い始めたら？

横山恵美由はつい先日、そんな友人の愚行を目の当たりにした被害者の一人である。

(罰当たりにも程がある……)

藤沢駅北口行きのバスの中。彼女はそんなシュールすぎる神仏への冒瀆を思い出して、陰鬱なため息をついた。

「夏休みだっていうのに毎週毎日お寺に通わないといけないんだろう……」

七月下旬。中学生は夏休みである。陽炎に揺れる旧東海道は、江の島に海水浴へと向かう車両がまるで蟻の行列のようにひしめき合い、なかなか進む気配は無い。つい先日、コロナが五類感染症移行となり、無理にマスクをつけなくて良くなった事は大歓迎だったが、人々は三年ぶんの時間を取り戻そうと堰を切ったように、世界中からこの片田舎になだれこんでいるのだ。

車窓から空を仰ぐと、目を焼くような光。太陽に照らされた入道雲が塩気を含んだ南風に流されていく。それ自体はありふれた季節の空模様だが、人並以上の青春を渴望している彼女は見えない何かに追い越されていくような気持ちになった。

(……おかしい、どうしてこうなった)

蒸れた背中をくすぐるように、衣の中で一筋の脂汗がつたう。無意識に背中に手をのばすが、肥満ぎみの腹部が締め付けられていて、思うように掻くことができない。ひっくり返った亀のように、焦りのゲージは増すばかりである。

(ああもうっ。带キツすぎ……)

何故かというと、慣れない着物を着ているからだ。「彼女たち」はこの数日、大庭神社で着付けをしてもらってから、遊行寺に通う日々を続けているのである。

「うおおお、いと速し！　いと速し！」



「あんたそれバス乗る度に言ってるじゃん。こんな<sup>さきしよ</sup>渋滞で目を回すとかマジうける」

「それがしの前生では馬より疾き乗物は無かったのだ！ …… オエッ」

「うわ、乗り物酔いのな」

「……ごくん」

「うゑ、飲んだ」

仏頂面のギャルト、そのご先祖さまの室町人。もちろん、原因はこのゾンビ二人だ。

「あああああもう！ 何で!？」

この世の不条理というサウナに耐えかねた彼女は、おそろいの白い衣を着て和氣藹々としている餓鬼んちよたちに思わず声を上げた。

「エミュー、バスの中なんだから静かにしないとダメだよ」

「おかしいでしょ！ 檀家でも無い上に信仰心も皆無なあたしたちが何でお寺に行かないとい

けないの？ 出家か？ お前ら出家するのか!？」

「しょうがないじゃん。だってそうだったんだもん」

こはぎはてるの背中をさすりながら困惑している。

「これも功德ぢや。恵美由殿」

「てるちんさあ……。いくら人助けだとはいえ、夏休みだよ!! おはぎがあの時パラパラなんて踊らなければさあ、今頃海でも都会でも遊びに行つて青春出来たじゃん!!」

「今踊ってるのはバラバラじゃねーし。盆踊りだし。徳積んで、浴衣着て、盆踊りまで出来るんだからけっこうな青春じゃね?」

「どこがよ……」

これが夏祭りの縁日ならどんなに良いことか。自分が着ているのは屋台の通りで手をつなぐ陽キャカップルがまといっているような華やかな浴衣ファッションではない。ぱっと見れば死に装束。白地ベースの着物だ。輪廻袈を首に懸けて、時宗の檀家が法要の場でまとう装いである。

「ギヤル殿、盆踊りでは無いぞ。『踊念仏』ぢや」

「そう、それぞれ。エミュー、似たようなもんっしょ?」

「全然違いわ！ 一遍に謝れ！」

彼女たちがこの夏踊る事になったのはいわゆる「踊念仏」。現代の夏祭りで行われる盆踊りのルーツになった芸能だ。日本史の教科書を開けば大抵、坊主たちが片瀬の浜の仮設ステージで鉦を打ち鳴らしている絵のページが必ずある。鎌倉時代にそのライブを主催し、踊って跳ねてのロックンロールな念仏を広めたのが、時宗の開祖、一遍上人その人だ。

踊念仏、もとい盆踊りの「聖地」こそ、この藤沢。遊行寺なのである。たぶん。

「英語で言えばイメージ変わるんじゃない？ ……ジャパニーズ・ネンブツ・ダンシング？」

「いや、英語で言っても変わらないし余計にカオスだから……。ああもうこんな田舎やだ！ あたしは都会に遊びに行きたいの〜！」

『ピンポンパン』 つぎは、遊行寺前。遊行寺前でございます。事故防止上、やむを得ず急ブレーキをかける場合がありますから、手すりやつり革におつかまりください』

バスのアナウンスが流れると同時に「ピンポン」と相づちに電子音が響く。



「くつ、恵美由殿に先を越されたのう……」

「張り合っとうするし。ねえ、エミュー？」

「……………」

それでも彼女は脊髄反射的に停車ボタンを押していた。どんなに悪態をついても、内なる真面目ちゃんはどうしても治らないらしい。

「はあ……東京行きたい……」

たった一人の女子中学生のジレンマなど知るよしも無く、『湘南』と呼ばれるこの地域は時を刻んでいく。藤沢市主催のイベント『**遊行の盆**』まであと数日。この盆の道にいたるまでの長いあらしに、しばしお付き合いいただきたい。

## 第二段 盆の道

そもそも、この顛末の由来を詳しく尋ねるならば、夏休みの前。七月の中旬に時を遡らなければならぬ。

「――宿題、めんどくね？」

場所を申せば、湘南ライフタウンの田園地帯にある大庭楓の自習教室。小さな勉強スペースの机の上に積み重ねられた書籍の山を前に、小栗こはぎは簡潔かつ率直な感想を述べた。

「そりゃあ、宿題を喜んでやる子の方が珍しいけどさあ……。何これ。湘南大庭図書館で借りてきた本？」

ギャルは無言でこくこくと頷く。説明が下手くそすぎる彼女に訊いても埒があかないので、楓の視線は自ずと背後で一応申し訳なさそうにしている共犯者の恵美由の方へと向かった。

「楓お姉ちゃん、場所だけ貸してもらえないかな？ 時期もあつてか図書館の自習席、満席で空いてなかったんだよね。近くのファミレス使うのもお金かかるし……」

「いや……自分の家で勉強すればいいじゃない」

「で、でも、ナホねーちゃんが『勉強教えるのはカエデさんの方が上手いから』って言うから」  
言い訳くさいと直感が告げる。楓の目線は再び恵美由の背後に隠れている共犯者ナンバー2、友人の市松人形に移る。

「だって私、神職ですし。楓さんは本業じゃないですか」

「自分が教えるの面倒くさいからってこの二人までボクに押しつけるなよ……」

楓は彼らの言い分を頭の中で整理する。どうも中学で一足早く夏休みの課題が発表されたらしい。レポートや自由研究を少しでも有利に進めるため、地域の学生たちがこぞって図書館に押し寄せたようだ。このギャルたちはその椅子取りゲームに負けてこちらに逃れてきたのか？  
とはいえ、しっかりと参考書籍の獲得には成功しているように見える。結局のところ、あわよくば宿題を手伝って欲しいという魂胆だろう。まあ、近年問題視されているチャットAIに頼ってズルをするよりは殊勝であるけれども……。

「はあ……」

この場所の責任者である彼女は招かれざる来訪者たちに困惑した。そもそもこの場所是不登校など事情を抱えている子供たちの居場所だ。ボランティアとして利用者に勉強を手伝ってく



れるならまだしも、経済的に問題の無い二人が友人（伊奈帆）の縁を宛てにして宿題代行を依頼しようというのならたまったものではない。

「自習する場所として空いている机を使うなら構わない」

「楓お姉ちゃんありがとう！」

「でも、君たちは年長者なんだから、宿題そのものを手伝うのはお断りだよ」

「いや、流石にそこまではしねーし。ただ、日本史の宿題——アイツなら強いと思って」

ギャルの視線は教室の隅の机で突っ伏している黒髪のコけしに向かう。

（それがしの「花」はとうの昔に散っておった……）

てるはしおれた植物のように沈んでいた。彼女と一緒に遊びに来ていたのか、伊奈帆の飼った猫のコマさんが彼女の腕におでこをすりすりして慰めている。

「ああ、慰めてくれるのか猫三毛殿」

「……勝手に愛猫の名前を変えないでほしいのであります」

「……何でアイツ、テンションサガってんの？」

「利用者の子供たちに自作の物語を披露したら不評だったんだって。藤沢さーん、ナホたちが



来たよー」

ちなみに、この教室においてるは、かつての恵美由と同じく「御厨家で預かることになった横山家の遠い親戚」という設定でこの場所に転がり込んでいる。楓は保護者たちの来訪を彼女に告げるが、魂抜けかけの身にその声は届かなかった。

「てるちんの自作品……。ああ、そういう事」

その声

人の声と単純な簾の音色ひとつで物語を表現する室町時代の説経節は、映像媒体に慣れ親しんだ令和の小童たちに理解してもらうにはあまりにハードルが高すぎた。

「何を言ってるのか分からない」

純真無垢・かつ残酷な評価。持ち前の語り芸一つで前世を生き抜いた彼女にとって、それが理解されないのは、己の人生そのものを否定されたのと同義である。

もはやこのまま食を絶って即身仏ミイラにでもなろうかと思ったその矢先。聞きなじんだやかまし

い声が耳の奥に届き、魂はゆららさららと現世に引き戻された。

〔「初心忘るべからず」……ということかの〕

まだだ、自分にはこの世でやるべき事があるはずだ。正氣に戻った室町人は、ギリギリ己の前世を聞きかじっている保護者の巫女さんにすがりついた。

「伊奈帆殿、何故ぢや……。『をぐり』を令和の言葉に則して語ろうたに、何故、衆生の心に響かぬ……！」

やはり、「あの『小栗判官』を子供たちに披露してしまったのか」と三人はため息をついた。

「そりゃ、ムズすぎつしょ。あれからようつべで説経節やつてる人の動画見てみたけど、うちにはムズすぎてさっぱリンゴだったもん」

「リンゴって何だよ。リンゴって。でもその動画、一緒に聴いてたけどおはぎの言う通りだったよ。『説経浄瑠璃』っていう三味線弾いてる江戸時代のスタイルのやつ？ BGMは付いてるけど古文でしゃべっているし、お話もトンデモな内容じゃん？ あらすじを知ってる上で聴かないと全滅感情移入できないんだよね」

「ぐはっ……」

六〇〇年越しの観客によるクリエイターへの死体蹴りである。

「さ、されども観阿弥・世阿弥殿らの能は今の世も親しまれているようではないか。トシヨカ  
ンに草紙が沢山あったぞ！」

「能や狂言、歌舞伎だって同じですよ。話しことばが中世と違うんですから。現代では、物語  
のあらずじや、ある程度の予備知識を持った一部の層しか楽しめないんです」

「そうそう、古典鑑賞って年配の人の趣味な印象があるよね」

「うちのじーちゃんばーちゃんも元気な時はエビゾーの講演とか見に行ってたのかなあ？」

てるがやったような彫をこするスタイルの説経節は、近世、すなわち江戸時代に入ると三味  
線の伴奏や人形劇などを組み合わせた「説教浄瑠璃」へと発展する。しかし、この時代には既  
にもう「分かりづらい」現象は起きていた。とりわけ江戸中期にもなると、歌舞伎が大流行す  
る。ここまできると舞台技術も発展して現代の演劇と遜色ないほどの工夫を凝らした作品も多  
い。ビジュアル的に優れたエンタメに庶民のシエアは流れていき、説経節は衰退したのだった。

ただ、幸いな事に『小栗判官』をはじめとした説経の一部の演目は歌舞伎に吸収されたり、

テキスト化されて読み物になったり、媒体を越えて存続したし、語り芸としての説経節も地方を巡業する盲目の瞽女（こぜ）と呼ばれた女性らによって昭和の高度経済成長期までは細々と、消えかけの灯火のように受け継がれてきたのである。

「ひたすら衆生を楽しませるのみが芸能の役目ではないのだが……」

それでも自分たちの作品はただの娯楽じゃないのだ、もっと大事な役割があるのだ、と言いたげなてるを、こはぎがなぐさめる。

「まあ、作品が何百年も遺っただけすごいんじゃない？　うちら、前のシーズンのドラマだって何やってたか憶えて無いし」

「アニメだって一年に何百作品もやってるでしょ。海外作品も含めたらどれくらいあるんだろうね。あたし、倍速視聴しないと追えないかも」

「倍速したら早口すぎてワケわからなくね？」

「そうしないと、クラスの話題に合わせられないじゃん」

コンテンツ市場は供給が飽和している。アニメを例に取っても、二〇二二年に制作された作品はなんと三二〇本にも上るといふ。もちろん全部視聴する猛者は希であるが、ここまで来ると純粋にひとつの作品を楽しむ時間は少なくなるだろう。恵美由のように他者とのコミュニケーションツールとして薄く広く内容をおさらいしているだけのZ世代は多い。

「……まるで糞べらのようぢゃの」

『くそべら』ってなんぞ？」

「汝らが厠で尻を拭くのに用いている料紙のようなもんぢゃ」

「ああ、てるちん、それは『トイレットペーパー』っていうんだよ」

魂を削って紡ぎ出された物語が一瞬にして万人に披露され、消費され、明日にはちり紙のようになんて去られていく現代。クリエイター目線で見れば、ある意味賽の河原のようなものだ。

しかし一方で、てるは己の生きた中世の人々がいかに娯楽に飢えていたかも実感していた。

作品を発表するとき、令和の世なら物語は本や電子書籍として出版できるが、中世ではそうはいかない。紙自体が貴重品だったし、大量生産するにしても印刷機なんて無いから一冊ずつ手作業で書写し、うっし間違いないか校合（チェック）しなければならぬ。それらのハード



ルを乗り越えて仮に草紙（冊子）にできたとしても安価に売る事は難しいし、そもそも庶民は識字率も低いので元も子もないのだ。その頃の書籍は必然的に公家や武士、僧侶など文字を読める一部の身分階層のサークルの中に留まらざるをえなかったと言えよう。

だからこそ、彼女は精一杯、頭の中の和紙に描いた物語を口で語った。しゃべるだけなら無料だし、貧しかったり、目が見えなかったり読み書きが出来ない者でも楽しめるからだ。聴く方も、祭りや市場が立つ日、全国を巡業する彼ら旅芸人に出会えなければ次聴けるチャンスは無い。文字通りいつ死んでもおかしくない世界。道々を歩けば人骨をくわえた野良犬に出くわす事なんて珍しい事では無い。だからこそ一期一会の物語に耳を澄ませ、内容を魂に刻み付けようとした。その人々のおかげで、『をぐり』の名は、今も在る。

「はあ……。この時代にそれがしの出来る事は無いのやもしれぬな」

てるは結局、己のやっていた事は貧しい時代だから受け入れられたのだと痛感した。なにせ全身の穴という穴をふさいでいても物語が流れ込んでくるような世の中だ。みんな、あえて耳だけで情景を想像する行為にエネルギーを費やそうとは思わないのだろうか。

（かの一遍上人とて、「捨ててこそ」と言っていたではないか）

仏教において執着は厳しく諫められる。作品に固執するのも執着。悟りの道に背くもの。そう心に念じて納得しようとする。

「いや、あるよ」

小さくなった背中を励ますように、ぽんと手が置かれる。

「……のうギャル殿、まことか？」

かつぱと顔を上げたと同時に、今度はボン、と彼女の目前に、本の山が現れる。

「……は？」

「夏休みの宿題で日本史の課題が出たんよ。今流行りのチャットG○Pなんかよりあんたに直接訊けばサクサクツと終わるじゃん？」

てるの目の輝きは、一瞬にして恨めしい蛇のにらみへと変わる。

「こんの餓鬼阿弥が——ってうわ!？」

不真面目な子孫に喝を入れようとげんこつをこはぎの頭上めがけてのばしたそのときだった。その場に居た全員が足元にふわっとした違和感を感じたと同時に、部屋全体がきしきしと小刻みに振動しはじめた。

「あ、地震だ」

「最近多いですね。関東大震災からちょうど百年ということもあって不安になります」

恵美由と伊奈帆が安堵しようと顔を見合わせた矢先、机の下から変な呪文が聞こえてきた。

「マンザイラク、マンザイラク……」

こはぎが不思議そうに机の下をのぞき込む。

「何言ってるし？」

「万歳楽。地震除けの芸能ぞ……」

「??」

中世のまじないの力だろうか。地震はすぐに収まった。

\*

『先ほど駿河湾南万沖を震源とする地震がありました。この地震による津波の心配はありません』

「お、さっきの震源って向こうの方だったのか。最近多いなあ」

楓が別室でテレビを聞き流しながらこども食堂の夕食の準備に取りかかっていた。一方、現代人の三人は引き続き教室の片隅で中世人を囲んでいる。

「……で、シुकダイ、とは」

不機嫌MAXなてるは、頬杖をつきながら片手で目の前の書籍をべらべらとめくる。「宿題」の意味くらいは彼女も既に解っていたが、どうも普段やっている算数ドリルのように、与えられた問いの答えを書くだけのシンプルなものではないようだ。

「社会科の課題でさ。興味を持った地元の歴史の事柄について調べて四〇〇〇字のレポートにまとめないといけないんだよね」

「れぼーと?」

「えーと、何て表現すればいいんだろう。てるちゃんが今読んでるその本の内容みたいに、誰かに物事を説明するような文章を書かなくちゃいなくて」

「なるほど随筆に毛がはえたようなものか。して、ご兩人、題は決まっておるのか?」

「うちは、『小栗判官』について書くよ」

「ハッ。カタツブリのように懈怠けたいなヤツぢやのう」

作者に訊けば楽に文章を書けると思ったら大間違いだといわんばかりに鼻で嗤う。

「でも、この春イナホさんに頭痛くなるほど本を読まされたし。研究者によって言っていることも違う気がしてさ。あんたが実際に見てきた事と比べてみたらもつと違いや新しく分かる事もあると思うんだよね」

「ほう……」

てるは少し思案すると、こはぎの言っていることにも道理があると思ったのか、小さくうなずいた。

「それがしもこのひと月、トシヨカンで後の世の者たちが『をぐり』を、説経をいかに伝えていったのか気になって書籍を漁っていたのだ。改めて令和の世で語り物を続けていくためにも、調べる必要があるからの」

「……じゃあ、いいの？」

「げにもぞ」

てるはいかにもだ、と承諾した。

「すごい。おはぎのレポート、作者公認じゃん」

「ごほん。こはぎさん、頭が痛くなったりには役に立ったでしょう？」

「うん。ゾンビが蘇る程度には」

「そうそう、そうやって知識を積み重ねていけば大学に上がった時、卒業論文だって楽に書けますよ」

「でも、てるが蘇った後は内容ほとんど忘れたんだよね。最初から読み直さないと」

興味のない事はかたっぱしから忘れていくニワトリ並みのギャルの記憶力の前に、アカデミズムは無力であった。

「はあ……。もうこはぎさんは放っておきましょう。恵美由さんは何か決めていますか？」

「それが全滅決まってなくて……」

苦笑いを浮かべながらもじしている恵美由を見て、伊奈帆はきよんとした。普段しつかりとしている彼女ならこのくらいのレポートなんて朝飯前だろうと思っていたのだが。机の

上に並べられた図書館資料に目をやると、内容はバラバラで、一貫性がない。中学デビューでコミュ力は上がったが、自由なテーマの中、目的を決める事はまだ苦手のようだ。

「ナホー。こはぎちゃんばかり優遇するのも不公平だし、何か考えてあげたら〜?」

会話の内容を台所から聞いていたらしい。教室の外から楓の助け船が届く。

「そうですね。でしたら私が学生時代に研究していた大庭御厨の歴史について調べたらいかがでしょう」

「ええっ。この地域、バイオレンスな事件があつたんでしょ。確か『天養記』って古文書に載ってる……」

「そうそう。源頼朝のお父さん、源義朝の大庭御厨濫妨事件ならこの地域の出来事ですし、古文書の解説が出来たらカッコいいですよ?」

恵美由は首をぶんぶんと振った。

「あたし古文書の解説なんてムリい〜! てるちん読める?」

「そもそもその書は、官言旨であろう。どこぞのお偉い公卿のしたためたものだろうから、それがしでも読むのは億劫ぢゃ」

『天養記』の実態は、事件における一連の訴訟文書の案文（写し）を貼り繋いで巻物にしたものである。さすがに室町人も、平安時代の朝廷が発給した裁判記録は古いしカタすぎて読みたいくないらしい。

「その筋では有名な史料ですから、ちょっと調べれば誰かの読み下しはネットに出てくると思いますけど……。うーむ、恵美由さんなら私が学生時代やりのこした研究もうまくレポートにまとめられると思ったのですが……」

「中学生に何をやらせようとしてるんだよ！ ……具体的には何よ」

「源義朝の婚姻関係についてです」

「……頼朝。パパがどうしたの」

「彼が生前娶った女性と子供たちの居住地を地図上に配置すると、東海道のルート上にうまくあてはまるんです。このことから義朝は要地の女性と結びつく事で京都―鎌倉間の交通網の支配を画策していたのではないかと……」

「地図上に配置って……何人娶ったのよ？」

「少なくとも四人以上はいたような……。息子は列挙できるだけでも八人はいますね」



「いや、ただオンナ好きなんだよ。単純に現地妻でしょ義朝の！ 姉ちゃん、真面目な性格なのに何昼ドラみたいいな事やってんの!？」

「いや、それでも真面目な研究なんですが……」

相手は史学科卒業の学士。かたや自分は乙女ゲーに出てくるイケメン武将くらいしか知らない素人。理解出来るわけがないと思っていたものの、あまりに意味不明すぎて恵美由は尋ねた事を後悔した。

ちなみに研究の趣旨とは異なるものの、このことに言及している論文は実際に存在する。

（岡陽二郎「中世居館再考」——その性格をめぐって——）（五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館 一九九五）

源氏代々の居館は京都の六条堀川にあり、義朝はここと鎌倉の間をしばしば往来していた。彼の子供のうち、長男の悪源太義平は鎌倉の東、房総半島への海上路を擁する三浦半島に住んでいる。そして、次男以降の息子と生母たちを列挙すると、朝長の母は秦野地域に住んでいた波多野義通の妹、頼朝・希義は熱田大神宮司藤原季範の女、範頼が遠江池田の遊女、全成・円成・義経の母は京都の常磐御前である。筆者は「このことから鎌倉を挟む形で交通網上の要

所要所に自分の年長の子供を配置して、交通網を押さえようという義朝の意図も伺える。」と指摘している。

大庭御厨は東海道のルート上にあり、しかも義朝が東国の拠点にしていた鎌倉のまさに隣。そんな近所に「ここは神領だから」と自分に従わず、せっせと伊勢神宮に貢ぎ物を送っている莊園があるじゃねえかと。東国に根を下ろし、都への野心を抱く彼にとっては都合の悪い場所だったに違いない。……と、補足が長すぎて完全に話が脱線してしまった。再び令和の女子中学生たちの会話に戻っていただこう。

「……」

「ほらー！　てるちゃんもイミフ過ぎてフリーズしちゃったじゃん！」

「ふござ……は、それがしは何を……」

てるは一瞬うたた寝をしたような状態になっていたようだ。

「伊奈帆殿の話を聞いたとたん、魂が夢の中にいざなわれたような気がしたのだが……。ふあて、何だったか」

「ほら、相当眠くなる内容だったんじゃない。自分語りNG！」

「申し訳無いであります……」

夢は見ても、目醒めた時には内容が思い出せない事は往々にしてある。てるの胸の中には言葉にできない強い郷愁の感情だけが残っていた。

「――別に、古文書だけが歴史の手がかりじゃなくね？」

そんなとき、こはぎは蔵書の中から『絵巻に中世をよむ』というタイトルの本を手にとった。

絵画史料、すなわち絵巻物に描かれた人物や道具などを手掛かりに中世人の営みを研究した論文集だ。

「そっか、絵ならまだとっつきやすいかもしれないわね。図版を増やせば枚数も稼げるし」

実際はそんなに楽な作業ではないのだが、恵美由自身は辞書を片手に古文書とにらめっこするよりはずっと良いプランだと思った。確か、『鳥獣戯画』だったか。絵巻物というのは現代のマンガのご先祖様だという紹介をテレビ番組で見た事がある。ストーリーも楽しめて一石二鳥

かもしれない。こはぎの手から書籍を受け取り、ページをめくってみた。

「ナホねえちゃん、このページに出てくる『一遍聖絵』って、遊行寺のお坊さんの一遍だよね？」

「ええ、一遍の生涯を描いた作品です。片瀬での踊念仏のシーンが有名ですけど、他にも鎌倉時代の人々の暮らしがすごく細かに描かれているんですよ。面白いですよ」

論文集の図版は製本の都合上、モノクロ印刷で縮小されている。恵美由は、もっと間近で色彩や詳細なディテールを見てみたくなった。

「これって、博物館に行けば実物を見られたりする？」

「一部を遊行寺の宝物館に収蔵していますね。企画展によってはガラス越しに見られたはずですよ」

「今スマホで調べてみる……。ヘイSeri、遊行寺宝物館のサイト検索して！」

「恵美由殿は式神を使えるのか！ さすがはクツネの子ちゃ！」

スマホを陰陽師の術と勘違いしている室町人を横目に恵美由がAIに呼びかけると、画面にブラウザが立ち上がる。

「……よっしゃ、ちょうど展示してる！ 行こう遊行寺宝物館！」

「寺……か。もう恵美由殿、今、道場はどうなっておるのだろうか」

「そういえばてるちん、まだ行つて無かったね」

「それがしの住んでいた閻魔堂はまだ在るのか？ 何か残っているか？」

「閻魔様は知らないけど、『小栗堂』って建物はあるよ。その裏手にてるちんのお墓があるんだよ」

「さあらば、私物が何か残っているやもしれん」

「確かに住んでたんだもんね。でも、お墓は入れるけど、小栗堂の中は一般公開してないみたいだよ。外から参拝はできるけど……」

春先の聖地巡礼の記憶を辿る。あのとき二人は小栗堂の堂守に『小栗略縁起』のコピーをもらうことができたが、コロナもあってか対応は境内で。普段開いているのは隣接する民家を兼ねた寺務所のみらしく、小栗堂自体はガラス戸で閉じられていて薄暗がりの先の本尊の姿もよく見えなかったと思う。

「ぬう……。一体どうなっておるのだ。恵美由殿の話の限りでは、それがしの草庵がまるで別の住まいにされているようぢや……!」

てるは苛立ちを覚えた。ついさっきまで住んでいた終の棲家に、いきなり知らない誰かが住みついて、勝手にリフォームまでされてしまったように思えたからだ。こんなとき、我ら怒れる中世人なら「物の戻り（所有権）」を主張して強訴するはずだとも思った。人に譲渡したものは、手元を離れたとしても、本来の持ち主に一定の権利が残るとというのが彼らの考えである。実際、鎌倉時代の徳政令がその論理に則ったもので、「売買した土地を元の持ち主に戻すように」という裁判事例も存在する。

しかし、あの頃とはあまりに時代が違う。仮に「私は六〇〇年前に住んでいた者だぞ!」と怒鳴り込もうものなら、ただただ狂った女だと哀れまれ、医者を紹介されるだろう……。

かつて閻魔堂の主であった長生比丘尼も、現在は完全に部外者。その頃彼女を保護した有象無象の捨て聖たちの集団、「時衆」と、宗教法人として現代社会のルールに則って存在している「時宗」は似て非なるもので、今の彼女の居場所では無いのだ。

中世人のアナーキーな感情と、少しずつ解像度が増していく現代社会との狭間で、てるは渴いた笑いがでた。

「あ、そーだ」

再び小さくなった背中に、再びぽんと手が置かれる。

「今度はなんぢやギヤル殿……」

『学校の宿題』 っでことで遊行寺に交渉すれば小栗堂の中、見学させてもらえるんじゃない？  
実際、ウソついて無いし」

「……」

それは春先以来考えあぐねていた課題。部外者が遊行寺に接触するのに最もシンプルかつ正当な口実であった。

こはぎ以外の三人は、かっと目を見開き口を揃える。

「『それだ!!!』」

## 第二段 ビジット・ザ・グレイブ

「学生」という身分がいかに貴重で社会的信用を享受しているか。卒業するまでは気がつかないものである。かくして、その週の土曜日。遊行寺へと向かうバスの中に、こはぎたちの姿があった。

「そういえば、てるってバス乗るのも初めてじゃね？」

「うう……」

てるは、車窓を流れていく景色に目を見開き、硬直していた。別に、現代の東海道の街並みにショックを受けているわけではない。

「てるちゃん大丈夫……？」

「……黄水でそう」

「おうすいつてなんぞ？」

「はらわたから出る酸っぱいの……」

「エミュー、酸っぱいのってなんぞ？」



「ゲロに決まってるでしょ！ ナホねえちゃんビニールビニール！」

湘南大庭地域から遊行寺への移動時間は、混雑具合もあるがバスなら三〇分といった所だろうか。決して悪路でも飛ばしているわけではないが、はじめてのバス利用は室町人にとってはジェットコースターと同じである。

「ふう……」

こはぎに背中をさすられながら、てるは逆流する胃袋をなんとか押さえつけ、正気を取り戻す。

「おさまったん？ おばあちゃんの着物に吐かなくて良かったよ」

「かような上等な衣を汚せば祟られるわ」

「じゃあ着てこなきゃよかったじゃん」

「何を言う。これこそ檀家の正装ではないのか」

中学の制服姿の二人に対し、てるは白地の着物を身にまとっていた。以前、祖母の着物一式を御厨家に運び込んだが、その中の一枚らしい。首には「遊行寺」と刺繍がされた青紫の襷のようなものをかけている。

「まったく、応永の頃の小袖と違って帯が長くてきつく結ばねばならぬからの。臍物が締め付けられて余計に吐きそうになったわ」

「帯が太い？　どれも同じじゃねーの？」

「今の着物と違って、室町時代以前の衣は帯が細いんですよ」

室町時代、庶民は「小袖」という麻や木綿でできた衣を着ていたが、今の着付けで着られる着物との大きな違いの一つは帯だろう。その頃は紐や「平ぐけ帯」という細い帯で結び、成人女性はその上に「褶（しびら）」や「裳（も）」と呼ばれるエプロンをかけていた。『信貴山縁起絵巻』など、中世の絵巻物に描かれた人々を見ると胸元がはだけていて、かなりラフに着こなしていたりする。対して今のような幅広の「文庫帯」が誕生するのは江戸時代の宝暦・明和（一七五二～一七七二）の頃で、着付けに用いられる「太鼓結び」は文化十年（一八一三）に江戸亀戸天神の太鼓橋が再建落成された際、それにちなんで深川の芸者が結んだ帯の形が元といわれている。

「前に浴衣を着たとき、なんとなく着付けが大雑把だと思ったけど、そういうコト？」

「……。……湯帷子のように着られぬから、あの後、伊奈帆殿に着付けを教わったのだ」

「……まさか本場の方に『太鼓結び』を教えるとは思いませんでした」

「あ、ゴメン。何か室町人のアイデンティティ傷つけたかも」

「あたしたちが同じと思ってる着物ですら数百年で違うんだもんね。てるちん目には全部夢の世界のように見えてるんだろうね」

「げにげに。いちいち気にしていたら、気が狂うわ。……されども恵美由殿が遊行道場への約束を取り次いでくれて嬉しかったかの」

「本当に良かったですよ。恵美由さんと違って私のような社会人のどこぞの馬の骨の者では怪しまれるだけでしょうから」

「でも……」

交渉スキルの高さを褒める二人に対し、恵美由は表情を曇らせる。

物事万事望み通りとはいかない。折しも藤沢市役所による文化財調査が長生院に入っていて、タイミング悪く、本堂で作業中だという。見学許可は降りたものの撮影は禁止。本堂の寺宝を眺めるだけなら良いとのことだった。

「ただ妙なんですよ……。寺宝の調査はとうの昔に行われていますし、再度入る事なんてそ

うそう無いと思うんですが」

遊行寺長生院の寺宝は小栗判官伝説とからめて『藤沢市史』など昭和・平成に刊行された自治体資料で紹介・調査されてきたはずだ。寺宝の修復なら話は別だが、令和の時代に調査とは？これ以上研究を掘り進めるような事があるのだろうか。

「元々お寺の中は公開してなかったし。うち、エミューが交渉してくれたならそれがベストの成果だと思っよう？」

「でも、写真が撮れないとなると、レポートが書きにくいかもしれませんね」

「スケッチするから大丈夫だよ。うち、絵は得意だし」

「おはぎ、何故か美術は成績良いもんね」

「こはぎさんに意外な才能が……」

「でも遠目から眺めるだけじゃあ、この前行った時とあまり変わらないじゃん。てるちん、もしちゃんと見学出来なかったらごめんね……？」

申し訳ない顔で窺う恵美由に対し、てるはにっと微笑みを返した。

「かまわぬ。それがしとて、今は汝たちと同じ無縁の女童。参拝出来るだけで充分ぢゃ」

そう諭し、彼女は横目で窓ガラスに映る自分の姿を観た。

（今の身を観ずれば、恐らく一二とか一三とか、もつと若かった頃の肉体だろうか……）

虫食いの状態の前世の記憶をひねり出すと、少なくとも閻魔堂に止住していた頃の長生比丘尼は、少なくとも三〇歳以上はいつていたと思う。ある意味若返ったのだが、そこまで至る苦勞や悟りの道がすべて泡となつてしまったショックの方が大きい。

（仏の道……この世での役目を見つけるために、少しでも思い出せる事があれば良いのだがの）

てるは、改めて今自分が居るのは振り出しなのだと納得した。だからこそ、前世の自分と折り合いを付けて賽の目を振らなければいけないのだ。

『つぎは、遊行寺前。遊行寺前でございます——』

そして、足元に置かれた仏花をちらりと見た。

「今日の目的は……あくまで墓参りぢや」

\*

かくして不安を胸に抱いて遊行寺にやってきた室町人とギャルたちである。長生院の堂守さんは、春先にやってきた事を憶えていたのか、尋常ならざる笑顔を振りまきながら、入り口で出迎えてくれたのだった。

「藤沢市の重要指定文化財？」

「そうなんだよ。あれから急に決まってね。これから藤沢市は『小栗判官』を推していくんだって。近く発表する話だから、まだみんなには内緒だよ？」

「へ、へえ」

こはぎと恵美由は、賑やかな境内に驚きながら堂守の話を聞いていた。

本堂の扉が開け放たれ、堂内の仏前に並べられた会議用の長机の上には、まるで小さな博物館のように寺宝たちが横並びに陳列されている。ちょうど輸送作業が終わったようで、市の職

員さんたちは寺務所などで昼休みに入っているようだ。

「お主が堂守か。何故物売りのごとく什宝を並べておるのだ？」

事態を飲み込みきれない中、元・閻魔堂の主が異質な状況に疑問を投げかける。

「……え、お嬢ちゃんコスプレかな？ 丁度調査と修復が終わって寺に帰ってきた所。発表の時には一日限定で今並べているような形で一般公開しようと思っているんだ。ただ仕舞うのもつたいないし、学芸員さんたちと相談してリハールをやっていたって所かな」

「え、えと。あたしたち、夏休みの宿題で……」

「ああ、そうだった！ はいこれ。長生院うちの寺宝リスト。本堂に入るのは良いけど、宝物に触れたり、撮影するのはダメだからね。学芸員さんもいるから、色々教えてもらえと思うよ」

圧倒される恵美由に対し堂守さんは意気揚々と寺務所へと戻っていった。

「えっあつ。説明してくれないかい」

「まあ、いざという時は寺務所に行つて市の職員さんを捕まえればいいよ。せっかくリストをくれたんだし、まずはてるの持ち物がのこっているか見てみよ」

四人は手渡されたプリントに目をやる。

# 【仏像】

阿弥陀如来像（伝・恵心僧都の作座像）、小栗満重像（満重二十八歳の時の自作像）、聖観世音菩薩（照姫御守の一寸八分の観音）、閻魔法王像（小野篁作）、正観世音菩薩（照姫持仏木彫）  
太空中人像

# 【縁起】

小栗霊験記（二巻）、小栗略縁起（二巻）

# 【遺跡】

小栗と十人殿原の墓、照手姫の墓、照手姫の地蔵菩薩、鬼鹿毛馬頭観音、八徳水（目洗いの池）、相生六角欒竹、板碑二基

# 【その他】

照姫安産鏡（照姫姿貞古鏡）崇寧通玉古鏡、鬼鹿毛の轡・鐙、天狗の爪、小栗満重目筆和歌、照手姫菩薩提短冊

小栗略縁起、絵図、御札などの版木（十点）



聖觀世音菩薩

照姫御守の一寸八分の観音



照姫安見古鏡



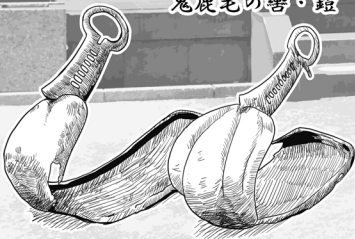
小栗満重像



太空中人像



鬼鹿毛の轡・鐙



小栗と十人殿原の墓

さすが『小栗判官』の舞台の寺というだけあって、作品関連の宝物は豊富だ。まさに照手の私物というものもある。さっそく、四人は靴を脱いで畳の上に身を置いた。

「おおおお！」

その声は線香の香りを感じるよりも早かった。堂内にてるの歓声が響く。

「閻魔様……阿弥陀様が残っておる！<sup>いたび</sup> 板碑も！」

小栗堂は中央に阿弥陀如来像、向かって左手に閻魔像。板碑りよくでいへんがんというのは緑泥片岩という青

緑の石で出来た板状の供養塔だ。これはガラスケースに仕舞われている。これらは今回の文化財登録に先んじて重要な歴史資料として知られていたものである。

「阿弥陀像は平安時代後期の作。藤沢市内最古の仏像です。板碑は南北朝時代。確かに時代も合っていますね」

「閻魔様の縁日……瞽女たちへの稽古……。短い間だったが懐かしいのう」

さっそく彼女の記憶に合致するものが見つかった。幸先が良いと、中学生二人はあれもこれ

もどてるの袖を引いて手あたり次第に宝物を見せる。

「てるちん、小栗判官の像があるよー」

「あー。それは知らん」

「鬼鹿毛の馬具だつて！」

「見覚えがあるような無いような……。誰かが奉納したんぢやろか」

「古銭は？」

「説経の駄賃か賽銭ぢやろうな」

「てるてる坊主、天狗の爪※つてなんぞ？」

※修験者が寄進したものらしい。

「天狗？ 何それおそろしや……」

「いや、ゾンビの方が怖いつつの。え、何。全部が全部てるの私物じゃないってこと？」

「そもそも、それがしは『ささら語り』であつて、この声ひとつを糧にしてきた者ぢや。少なくともこういう像や宝物は後世の者が尾ひれをつけて作ったものぢやのう」

『をぐり』は当然ながらフィクションだ。長生比丘尼、てるという「当事者」あるいは「証言者」が生きていた当時は口伝えで物語とその存在を示せば問題無かつたし、あえて様々な「証

「掘品」を創る必要は無いのである。

「じゃあ、こういう文章もあんたが作ったんじゃないんだね？」

てるは、絵巻などの文面にさつと目を通す。

『小栗略縁起』？ それがしが書いた文では無いな。今の『小栗判官』の内容から思い当つるに、それがしの書物——最初の『をぐり』の草紙は長い月日の中で幾度も焼亡していく中で失われたのではないか。内容の補筆を鑑みると後世の者たちが断片的な伝聞から再度組み立て直したのぢやろうな」

「そっか……。何かゴメン」

「語り物は口伝えて形を変えて面影は残る。書き物は字義を正しく伝えられるが、たやすく朽ち果てる。兵火の時は本尊が最も大事ぢやから、火の手が激しければ捨て置かれよう。それが紙の宿命ぢや」

『小栗略縁起』など長生院の縁起類はいつ作られたのか？ 種明かしをすれば、近年の研究※で江戸時代に制作されたものと判明している。

もちろん、縁起そのものは少なくとも寛文元年（一六六一）以前には存在したと考えられているが、てるの言う通り原典は幾度の兵火で焼失してしまった。焼失の度、その断片の収集が試みられたが、遊行第三十九世・慈光上人（一六一一～一六六二）の時代に長生院はふたたび火災に見舞われ、このとき什宝、記録、縁起がごとごとく焼失してしまったという。その後、元禄年間（一六八八～一七〇三）に遊行第四十八世・賦国上人（其阿呑了とも名乗る。一六五六～一七一二）が縁起を校合・浄書、それを土台として、文化八年（一八一二）に長生院の再建のために小田原から派遣された「慈導」という僧や「阿部石年」（阿部石道とも名乗る）という地元の俳人らによって再編・修復され、現代に伝わったのだという。

※桑名里『中世語り物文芸の研究 信仰・絵画・地域伝承』三弥井書店 二〇三

「いかにギャル殿、『れぽーと』やらは進めなくて良いのか？」

てるの指摘にこはぎは「あ」と急いでバッグから筆記具を引っ張り出す。

「てるの事も大事だけど、うち、レポートやらないと」

見慣れぬ寺宝たちに気を取られてこはぎは重要な目的を忘れていた。てるの私物であるかなにかに関わらず、これらはレポートにしてまとめなければいけないのである。

「おはぎ、学芸員さん呼んでこようか？」

「いや、あとでいいや。とりあえずこの遺物を記録するのに時間かかると思うから」

スケッチブックを開くと、鉛筆がすさまじい勢いでキャンバスの上を走り、記録されていく。

「えっ……デッサン上手すぎないですか……」

バスの中で「こはぎは絵が上手い」と聞いていたとはいえ、明らかに絵筆を持ちづらいであろう長いネイルの手から繰り出されるプロ顔負けの筆さばきに、伊奈帆は唖然とした。明らかに矛盾した光景だ。

「こはぎさん、画塾にでも通ってたんですか？」

「がじゅくってなんぞ？」

「独学!? いやいやいや」

彼女は脳内のデータベースから整合性を取ろうとする。

「そうだ、『小栗の乱』で落ち延びた史実の小栗助重は出家してのちに絵師になったとも聞きました。……これも先祖からの遺伝なのですか」

伊奈帆の言葉を補足すると、宗湛そうたんという小栗氏出身の室町幕府の御用絵師がいた。出家前は

小栗満重の子、助重その人と伝わる。てるの言うように、こはぎが子孫であるならば、納得がいくような、いかないうような。

「え、初耳。てるちゃんも絵上手いの？」

「えー、あー。それがしは腹違いゆえ……」

「あつ（察し）。……ゴメン」

小栗氏の何者かと深泥池の大蛇の子を自称する彼女でも、すべての才能が遺伝するわけでは無いらしい。

「みんなはそのまま続けてー」

ギャルが淡々と鉛筆を走らせる横で、三人は邪魔にならないように刷り物の展示コーナーに移動した。ここには長生院で発行した御札や絵図が置かれている。

「いかに恵美由殿、後世の者たちは『をぐり』を色々解釈して様々な形でタノしんだようぢやの。とくにこの歌は何ぢやろうな」

てるは二枚の刷り物のパネルを指さした。そこには、「文岳」という絵師の筆で小栗満重と長生比丘尼（照手姫）の「肖像画」が描かれ、彼らが「詠んだ」とされる法楽和歌（神仏に奉納するための歌）が漢文で添えられている。こちらの作者は不明らしい。前述の縁起の制作過程を考えると、阿部石年ら地元の俳人の誰かが創作したものだろうか。

# 【書き下し】

長生院壽佛房之眞影（印 長生院）

世廻宇佐遠

身尔之通末

頭婆々通比尔



此保都決廻  
美知茂志良  
傳寸俱羅武

相列

藤澤山清浄光寺中長生院



「世……夜露死苦……。いや、全く読めんわ……。てるちん読んでよ！」

「あて字ぢゃな。しばし待たれよ……。正しい読みは分からぬが、『世の憂さを、身に沈まづは、ついにこの、ほとけの道も知らずで過ぐらむ』といった所ぢやろうか」※

※読み下しは和歌山県編『紀州民話の旅』の記載に拠った。

「いや、それでも難しいわ。ナホねーちゃん！」

「ふむ、『世の辛い事を感じない人生は、最期までこの悟りへの道を知らないで過こしてしま」

『ようなものだ』といった意味でしょうか」

「やっと意味が通る文章になった……。ニホンゴ万歳だよ、もう」

絵筆を進めるのはぎの耳に、三人の会話が自然と入ってきた。

（辛い事を感じない人生……）

心の中で言葉がリピートされる。取り込み中の彼女を置いて伊奈帆はそのまま話を続けた。

「でも『ついにこの』で切れる句も珍しくないですか？ 五・七・五のルール無視で良ければ改行部分の『ついに』で切って『塩づけ道（近くを通る滝山街道のこと）』と読むのはどうでしょう」

「読む者もいるやもしれぬが……。これが本来神仏に捧げるために詠まれた歌であつたならば意味が通らぬの。蟬丸の歌に『これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関』という句があるから珍しくはなからう」

「話が高度すぎて意味わかんない！」

完全に恵美由が置いてけぼりになってしまった。てるは話をまとめる。

「いずれにせよ、この刷り物は参拝客向けに売っていたもんぢゃな。後世の者たちが閻魔堂の

維持のために、『をぐり』を使つて様々な形で生業にしようと考えたわけぢや」

「いわゆる、『二次創作』？ グッズ展開となると……この絵図はブロマイドって事？」

「完全に今の聖地巡礼ビジネスと同じですね。こっちが元祖なのでしょーけど」

これらの縁起類や絵図・刷り物は『小栗判官』の聖地巡礼に訪れたファンたちに有料で開帳・販売され、長生院の貴重な収入源となっていた。江戸時代の旅行記などによれば、開帳の料金は十二文で、地元の子供たちが案内していたという。この頃は大山阿夫利神社の石尊参りが盛んで、庶民の参拝が許される旧暦六月二十七日〜七月一七日の間は八王子方面と藤沢を結ぶ滝山街道は多くの参拝客で賑わった。街道の近隣にある長生院にとつてはまさにかき入れ時で、寺僧らはこれらのグッズを持参し街道沿いの長後方面まで出張・結縁を行っていたらしい。そういう意味では、伊奈帆の読んだ「塩づけ道」という解釈も現地でのキャッチフレーズとしてはアリかなと思う。

「で、今回こうして調査したのは重要文化財にして藤沢市を挙げて『小栗判官』を売りだそう

ってことなんだね」

いずれにせよ、どんなに時代が変わっても、コンテンツビジネスの形は変わらないのである。そして、『をぐり』は何度も形を変えて擦られ続ける。つまり所 本作のように。

「重要文化財での観光PR……。参拝者が増える……。景気が良くなりそうですね（嫉妬）」

実際、『湘南ゾンビのをぐりさん』第一巻を発表した二〇二三年九月から二ヶ月後の十一月、遊行寺長生院の小栗判官関連史跡は藤沢市の重要指定文化財に指定されることになる。中世から近世にかけて幾度の聖地巡礼ブームを作り出してきた『をぐり』という作品は、令和の時代は行政の手によって、再び蘇ろうとしている……。のかもしれない。

「でもあの内容で売れるのかな？」

「確かに、現代の作品に比べるとプロットが粗暴というか。まあ説経節の作品全般に言えますけど」

「失礼な。これでも『百万』とか『義経記』とか、『弱法師』とか……。あの頃人気であった様々な演目を組み合わせ、苦心して形にしたのぢやぞ」

「え、てるちん、あのストーリーって元ネタあんの？」

『『えいさらえい』のかけ声は観阿弥・世阿弥親子の『百万』という能から拝借したのう』

「それってパク……」

「まあまあ、著作権の無い時代ですから」

「ちよさくけん？」

思わず発覚したパクリ論争を横に、こはぎは絵筆を進めながら、長生比丘尼の「歌」の意味を何度も反芻していた。

「辛い事を感じない人生か……」

誰が考えたのか分からない「照手姫」が詠んだ歌。『をぐり』は伝承の相違こそあれども、照手姫は苦勞の末、安住の地にたどり着いたのだと思う。そんな「彼女」の和歌は、餓鬼阿弥のスーパーパワーと引き換えに、感覚と感情の表現を失ったこはぎ自身に突きつけられたメッセージにも感じられた。

この力を利用すれば、車に轢かれても死なないし、体育祭のかけっこでも陸上部のエースにだって勝てる。心なしか、今描いているスケッチの画力も上がっている気がする。自分の望みを増幅するような、この世ならざる力を利用すれば何でもできよう。

（でもそれって本当のシアワセなん？）

こはぎの心の鏡は曇っていた。恵美由のように、自分の限界と直面しながら、迷いもがき、個を模索する生き方こそ普通の中学生であると思う。春休みまでの自分もそうだったはずなのに。一体いつまでこんな体でいるのだろうか――。

「……あれ？」

虚しさを感じたその時、画用紙を走る鉛筆がぴたと止まった。

小栗判官像の影に、直径一〇センチ程度の金属の塊が置かれていることに気がついた。古びた花形の文鎮？ 何かと思い、寺玉のリストと自分のスケッチの描き残しを照らし合わせると、「これではないか」という物体に突き当たった。念のため、「持ち主」の肩を叩く。

「なんぢや。頼まれても絵は描かんぞ」

「ねえ、あれってあんたの私物じゃないよね？」

鉛筆の先で「それ」を指さすと、彼女も像の背後にあったためか存在を見落としていたらしい。明らかに目の色が変わった。

「あっ……。ああああ……」

「てるちん触っちゃだめ——」

さすがのように手を延ばそうとしたそのとき、小栗堂につながる寺務所の連絡通路から足音が響く。彼女はハッと正氣に戻り、行き場を失った小さな手は虚空を掴んだ。

「どうですか、宿題は捗っていますか？」

作務衣の堂守さんに連れられて、クールビズ姿のナイスミドルなおじさまが姿を表した。こちらは藤沢市の学芸員さんだ。すんでの所で怒られる事を回避して、女子四人組は苦笑いである場を取り繕う。

「こちら、学芸員さん。せっかくの貴重な機会だから、何でも訊いたほうがいいよ！」

「え、あ……ははは。時の沢中学校二年生の横山です。このたびは貴重な品を見せてくださりありがとうございます」

硬直するこはぎたちの代わりに、恵美由が愛嬌を振りまきながら応対する。

「その小栗判官像、自然な色合いでしょ。修復する前は顔がもつと赤い色で塗られていたんですよ」

「赤鬼みたいな肌だったんですね。あー、確かに今の方が立派かもー」

（ついさっき、隣にいる原作者から「知らぬ」とコメントされたとは口が裂けても言えない…

…）

恵美由が心の中でどう返事をするか考えていたとき、こはぎが口を開いた。

「その……鏡……。本当に照手の鏡なんですか？」

「え？ ああ、照手姫所持の鏡ね。あれ、展示し忘れていたのか……」

学芸員さんは、手袋をすると鏡を小栗像の手前に置いた。

「これは『八稜鏡』という古い銅鏡なんだ」

「はちりょうきよう？」

「そう、大陸から伝来した平安時代頃にかけての鏡の様式で、この花びらのようなシルエット

は、室町時代頃に日本独自の和鏡が浸透するまでの過渡期的特徴なんだ」

「へえ。えーと……いつ頃からここに……あるんですか」

「文化十年（一八一三）に葛飾北斎が挿絵を描いた『寒燈夜話小栗外伝』という作品には同じ鏡のスケッチがある。少なくともその頃には長生院にあったものだね」



かの有名な葛飾北斎も『をぐり』と無関係ではない。『寒燈夜話小栗外伝』という二次創作品に参加していた。当時の長生院に取材したのだろう、彼の筆による宝物の精細な絵図を残している。二〇〇年前には確実に存在していた事を示す貴重な史料だ。

「二〇〇年前か……」

が、室町時代に視線が向かっている彼女には、つい最近の出来事なようにも思えた。今のこはぎにとつて一番大事なのは、てるが生きた一四〇〇年代に存在したかどうかなのだ。

「じゃあ、もつと昔からある可能性は……?」

「作成年代的には『小栗判官』の時代にあつてもおかしくないものだと思うけど、もちろんあれはフィクションだからね。証拠は無いけど、個人的にはこの『天狗の爪』みたいにどこかの古墳や遺跡から出土したものを誰かが奉納したんじゃないかなと思ってますよ」

「失礼……」

そんなとき、思いの丈を叫びたいのに、必死に押さえているような声がした。足元に視線を落とすと、てるがもじもじとして立っている。

「もう、その唐鏡は曇って使えぬか……?」

「え？ ああ、もちろん鏡面は錆びていてダメだね。この手の銅鏡は半年もすると錫のメッキが曇ってしまうから、鏡磨きという職人さんに頼まないといけなくて」

「左様か……」

「他に何か聞きたい事はあるかい？」

「いや、在って良かった。大切にしてくださいの……」

「あ、てるちん」

てるはきびすを返すと静かに本尊に一礼する。そして、入り口に立てかけておいたアジサイの花を拾い上げると、すたすたと小栗堂を出て行ってしまった。

「てる……」

光の向こうに消えていく小さな背中では、こはぎの目には、どこか遠い家族との別れの姿のように見えた。

\*

てるが仏花を片手に小栗堂の裏手に回ると、その先には小さな庭園があった。

（ここが小栗満重と十人殿原の墓、とな）

この供養塔たちは本来誰のものであったのだろうか。彼女が不思議に思いながら横並びの墓石群を眺めていると、ぽちゃんと音がした。振り向くと、小さな赤魚が池の水面を揺らしている。なんとも風流である。

雑草が繁茂し、供養塔が雑然と屹立していたかつての墓所とは異なり、今のこの場所は、禅宗の庭園を思わせるような随分綺麗な庭だ。ここに己の「墓」があるという事はこぼれから聞いていた。

（……こなたか）

ご丁寧に、「照手姫の墓」と書かれた看板が出ている。隣に立つ墓石を見ると、あまりに滑稽な形が目飛び込んできて、変な笑みがこぼれた。

（ごりんのとう　ほうきょういんとう）

「五輪塔に宝篋印塔の組み合わせとは。あり合わせで上手く仕立てたものよ。もう？　地

蔵尊よ」

てるは墓を眺めるように向かいに立つ三人のお地藏様に話しかけた。(この厄除けの地藏は、かつて彼女が建立したものと伝わる)

『をぐり』の巡礼に來た者たちに、さも本物の墓のように見せたかったのだろう。明らかに異なる種類の石塔のパーツを合体させたものであった。この時代の人間は騙せても、応永の死に損ないには通用しないのだ。

(とはいえ実の所、我が身が死んでどのように葬られたか、知る術などないのだがの)

比丘尼とはいえ彼女自身は出家の体で芸能を行う時衆の一人にすぎない。立派な供養塔を建立されるような身分でも無かったし、せいぜい数多くある十鰻頭の一つだったはずなのだ。

(恐らくは、この庭園を造る過程で往古の土砂を掘り起こしたか……。それ故に、我が身の骸はギヤル殿と交わる事が出来たのやもしれぬな)

こはぎたちから、血肉を取り戻す前の彼女は「齒」だったと聞いている。本来埋葬して数十年もすれば、酸の強い東国の土は骨をも溶かし消し去ってしまうのに。それでも遺っていたのはやはり、自分の中にこの世への未練が残っていたという事なのだろうか、彼女はやるせない気持ちになった。

「よかった……。この世から消えちゃったと思った」

てるがぼんやりアジサイの枝先で池の魚と戯れていると、こはぎが姿を現した。

「消えられるならとつくに消えておるわ。勉強を放り出していかがした」

「スケッチは終わったよ。イナホさんたちは学芸員さんの対応してもらってる。……あの鏡、大切なものだったんでしょ」

てるは水面に映る自分の顔を見ながらつぶやく。

「……かかさまからもらったただ一つの形見ぢゃ」

「かか？ てるのおかあさんの？」

「然り。『をぐり』にも照手姫の持つ唐鏡として出したものぢゃ。実の所、遊女だったかかさまが慕っていた男にもらったものでな。かの者に七代伝わる鏡だったという。由来こそ失われていたが、一番残っていて欲しいものに邂逅出来た。感謝するぞギヤル殿」

「でもそんなに大事なもので……」

あんた、本当は手で触れて抱きしめたかったんじゃないの、こはぎはそう言いたかったが、言った所でどうしようも無い。言の葉をつぐんだ。

「ただ、鏡の力を借りられなかったのは惜しいのう。ああも錆びてしまつては霊力も残ってなからう」

「どういうこと？」

「鏡には神仏の力が宿る。あの霊鏡を依り代にして歩き巫女のごとくゆらさららと神降ろしをすれば、それがしがこの世に遣わされた意味を知ることが出来ると思つての」

「神降ろし？」

こはぎには聞き慣れない言葉だったが、なんとなく、恐山のイタコのような事をしたいということは想像できた。

『小栗判官』に出てきた鏡は確か……、未来を予言できるアイテムだったつけ」

作中において、七代「伝わる唐鏡は「持ち主に良い出来事がある時は、鏡面に神仏の姿が現れ、鶴と亀が舞い、不吉な事が起きる時は鏡が曇り、汗をかく」と書かれている。おそらく、あの鏡にはあの世とこの世をつないでメッセージを伝えるような力があつたのだろう。

「そこまでして、自分の役目を知りたいの？」

「汝としてそうであろう。前生さきしよで一度果たしたと思っっている身にはなおさらぢや」

そう言うと、てるは池に立っている看板を指さした。

「いかにギャル殿、この『目洗いの池』の由来はご存知か？」

「え……なんだっけ。堂守さんが『小栗判官が池の水で目を治した』って言ってたような」

「恐らく、本来は瞽女こにょに由来するものであろう」

「こぜ？」

「鼓つづみを芸にする盲目の女たちぢや。閻魔堂えんまどうに止住したそれがしの役目は、目の見えぬ者たち

に説経せいきやうを教える事ぢやった」

何度か作中で言及しているが、瞽女とは、盲目の女芸人の事だ。中世では鼓を楽器にしていたことがその名の由来である。江戸時代には三味線に持ちかえ、昭和中期まで諸国を回遊し、

説経師の演目や、警女万歳などの芸を語り歩いた。てるの時代から連なる純粹な旅芸人としての説経師の在り方を最後まで伝えた存在でもある。

「閻魔堂は元来諸国を回る警女たちが休息に立ち寄ったり、若い者に芸を教えたりする場所でもあったの。あの時代、目の見えぬ者は芸が出来なければ死ぬ。芸とは、語り物とは、彼らを生かすための術ちゃった」

「……だから『小栗判官』を創った？」

「遊行道場の焼亡がきっかけではあったがの。それでも、語れる演目が一つ増えれば一日長く、彼らは命を繋げられる」

二人は目洗いの池の中央に置かれている、苔むした小さな石仏を見る。

『をぐり』が今日まで伝わったのは決して語り物そのものが秀でていたからではない。聴く者たちが耳を傾けてくれたからであり、そして……あのみほとけがの、『ここから旅立った者たちが生きるために語り継いでくれた証でもあるのだ』と、わが身に論しているように思うのぢや」

会話の中で、こはぎは先日恵美由と出かけた俣野地域への聖地巡礼を思い出した。そこには



『小栗判官』にまつわる舞台だけでなく、「瞽女淵之碑」という川に落ちて亡くなった瞽女を吊った石碑があったのだ。(第一巻参照)

(きつとあの瞽女は……今いるこの場所を目指していたんだ)

福祉やバリアフリーが発達した現代ですら、光を失った世界の厳しさは底知れない。そのやさやかな保障すらない時代、食べるためには、暗闇の世界を歩かねばならなかった。てるや、名も残らない誰かが考えた演目が、彼女たちの道しるべだったのだ。

(てるの時いた種が、何百、何千……途方も無い人たちを生かしていたってこと?)

六〇〇年という悠久の時の流れに意識を向けた時、ただ意味が分からないと思っていた作品の中に、数多の命の光が見えた気がした。

「まあ、今はもうここに瞽女も訪れんようぢやし、改めてそれがしの役目は終わったと分かった。恵美由殿らにも悪いから、そろそろ墓参を済ませて戻る事にしようぞ」

てるは「照手姫の墓」の前に持ってきたアジサイを添え、手を合わせた。

「紫陽花はそれがしの生きた時代は死者に手向ける花であったのだ。ちょうど施餓鬼の時期はよく咲いていたのな。ま、死後、己の墓に参った者は、それがしくらいぢやろうな」

こはぎは昔の流行歌で似たようなシチュエーションの歌詞があったのを思い出した。ここに彼女は居ないし、死んでなんかない。主の居ない墓に祈る相手はきつと、空の向こうにいる幾千もの魂だろう。「照手姫」とはきつと彼女たちの事なのだ。

「……あんた、すごいよ。確かに成仏できるだけの事をしたと思う」

「ぢやる？（ドヤア）」

「チョヅク※なし。そこはケンソンしろし」※調子に乗ること。

己の足跡の面影を観て、てるは改めてここが前世から地続きの世界なのだと実感できた。そして、この世で生きる意味を見つけるまでは、二度とここに参るまいと誓うのだった。

「お互い、この世で役目を見つかけられるとよいの」

こはぎの目には、庭園を出て行く背中になんか少し元気が戻ったように見えた。



### 第三段 踊る大念仏銭※

※大念仏銭とは「南無彌陀仏」と刻印された金銭である。主に江戸時代、浄土真宗や浄土宗の信衆が贖付として持ち歩いた。

蟬の声が墓地に響き渡る昼下がり、小栗堂を後にした四人は遊行寺境内に繋がる坂道を話しながら下っていた。

「瞽女？ そんな人たちがいたんだー。琵琶法師みたいだね」

「エミュー、ビワホウシってなんぞ？」

「おはぎお前……この前国語の授業でやったばかりだろ……」

祇園精舎の鐘の声——からはじまる『平家物語』はおそらく最も有名な中世の作品だろう。

中学二年の国語の教科書にはほぼ掲載されていて、先生によっては冒頭文を暗唱させられたりする。物語を伝えたのは言わずもがな、盲目の琵琶法師たちだ。彼らも一つの作品だけで食べたいけるとは思えないので、時には説経の演目とか様々な芸を語ったかもしれない。

「恵美由殿の言う通りぢや。男は琵琶、女は鼓。つがいのようなもんぢやな」

「中世の職人たちの姿を描いた『七十一番職人歌合』の絵でも琵琶法師と瞽女がセットで描か

れていますね」

「七十一番？ 応永の頃より数が増えたのう。昔、それがしが世阿弥殿に見せてもらった歌合には、博打打ちが素っ裸で描かれていて笑い転げたわ」

「身ぐるみ剥がされたギャンブラーの絵があんの？ うけるー」

「げにげに！」

てるはその時の記憶がよっぽど滑稽だったのか、ケタケタと声が響く。無邪気に笑うその姿に現代人の三人は安堵した。

「お堂を出て行っちゃった時は心配したけど、なんだかてるちん、明るくなったね」

「此処に来る前は不安で胃が痛くなるほどちゃったがの。形見が残っていて、今後も大切にしてみらえるなら未練は無い。なにより、警女たちへ蒔いた種が実っていた事に励まされたのぢや」

てるにとって創作という行為は、己の承認欲求を満たすためのものではない。内容だつてあの時代に名声をとどろかせた犬王にも、世阿弥にも遠く及ばないだろう。ただ、無名の「さくら乞食」が生み出した物語によって数多の命を生かした事実。それが彼女の喜びであった。そ

して、譬女らの足跡をもっと知りたいとも思った。

「この世で知るべき事は数多ある。まだまだ成仏はできんの♪」

「なんか墓参りしたらめちゃうくちゃ元気になってるし。うちも自分ちのお墓に寄ってお願いしていいのかな」

「墓前で現世利益を願えば罰が当たるだけぢやぞ。ギャル殿はもっと勉強に励まれよ。今の懈怠ぶりでは祖母の靈魂が嘆かう」

「ぐへえ……超ブルー。でも、いいし。少なくとも今日宿題が進んだぶん、夏休みはベンキョーできるし？」

「いや、おはぎ。口だけで絶対勉強する気ないだろ……」

「……いや、うち、『ピリギャル』目指してるから」

「ウソこけ。その無表情の中で『マルキューのシヨップ巡りは外せないよねー』とか思ってるだろ絶対」

実際、ギャルが心の中で先祖供養を放り出して罰当たりな余暇の皮算用をしていたその時だった。

「だからあ、部活があるからムリって言ってるだろ！」

四人が遊行寺の巨大な本堂の脇を抜けた時、突然真横から甲高い怒声が飛び込んできた。一仕事終えて気が緩みきっていた恵美由は背骨に電流を流されたように硬直する。

「……ええ？ 何なに？ ケンカ？」

「道場で狼藉とは罰当たりな！」

一体何事か。てるは小道をそれ、跳ね馬のようなステップで拝殿につながるスロープをびよいびよい駆け登ってしまった。

「ああつ。てるさん！」

「追いかけないと。エミュー、走るよ」

「ああん。汗かくから運動やだー！」

三人が小さな背中を追うと、開け放たれた扉から本堂内部の状況が視界に入ってくる。どうやら椅子に座った着物姿の人物と、仁王立ちした運動着姿の若者一人がにらみ合い、口論をし

ているらしい。

おうな

「媼たちと孫か？ あの子共は何故仏前で罵り合っておる？」

「あ。」

こはぎと恵美由は思わずうげえ、となった。大声を張り上げているショートヘアのボーイッシュガールに見覚えがあつたからだ。

「私は母さんに頼まれて見に來ただけだってば。足腰も弱つてゐるのに寿命縮めてどうすんだよ！」

「『遊行の盆』はもうすぐなんだよ！ アンタがやらんと踊りが絶えちゃうじゃないか！」  
「知るか！ たかが盆踊りなんかより自分の体の心配しろよ！ そうすれば私だって陸上に集中できるんだから!!」

「千景、たった一日の稽古よりもそんなにかけっこが大事だって言うのかい！」

「大事に決まつてるだろ！ その結果でスポーツ推薦が決まるんだから！」

「アンタは何かにつけて受験受験で……」





（オニカゲ……！）

そう、五月の体育祭で恵美由に嫌がらせをしてきたアイツ。陸上部のエース、大仁田千景であつた。何でこの場所に居るんだ？　こはぎたちは驚いたが、いらぬ推理をする前に早急にこの場を離れないといけない事に気がつく。

（面倒ごとはゴメン。退散退散……！）

二人で状況を把握できない伊奈帆&てるの腕を引っ張り、やって来た道をUターンして逃げることにする。

「私はこの夏が人生で一番大事なんだ！　練習があるから帰るよ！」

「ああ待ちなっ……！」

「ぎゃああああつ！　何かアイツ走って追いかけてきた!!」

タイミングが悪いとはこの事。高床の本堂と石畳をつなぐ下り坂を降りようとした矢先である。恵美由の目にはただだつ！　と一瞬の速度でオニカゲの顔が迫ってきたように見えた。混

乱して、足がからまりそのままずっこけてしまった。

「ぶひい！」

「えっ？ あ。大丈夫か？」

驚いたのは千景も同じである。彼女にしてみれば、怒りにまかせて本堂を抜け出した途端、目の前で参拝客がずっこけていたのだから。怪我をしていないか手を差し伸べようとするが、頭の回転の早い彼女はすぐ違和感を覚え、立ち止まった。

「うちの中学の制服？ ……は？」

「何でアンタがここにいるん」

こはぎたちの存在を認識した彼女は、キツと眉毛をつり上げた。体育祭の時こそは最終的にジェントルマンとして振る舞ったが、内実、顔に泥を塗られた恨みは消えないのだ。

「それはこっちの台詞だ。コギヤルが寺に居る理由が知りたいわ」

「ガッコーの宿題だし。あと、うちのおばあちゃん、ここにお墓あるから」

一触即発になるかと思ったその時、薄暗い本堂からわらわらと白装束の年配の女性たちが現れる。

「その着物……」

どうしてここに？ と驚いた声をあげる。その視線の先にはてるの姿があった。

「はて？」

「いたた……。あつ」

恵美由も起き上がりながら驚いた理由を理解した。何故ならば、てるとその女性たちの着ている装束が、柄から帯、首に掛けた輪袈裟まで、全く同じ着物だったからだ。

\*

「結さんのお孫さんとねえ。いやあ、この着物を着て参拜してくるなんて可愛らしい。信心深かったあの人そっくりだわあ」

「まったくまったく。お菓子あげましょうねえ」

「あらやだ美登<sup>みと</sup>さん。袖の中に雷おこしなんて隠して。本堂は飲食嚴禁よお」

「まだこんなに小さな初孫を残して逝っちゃうなんてねえ……。これからだったでしょうに」

「……いや、小栗結の孫はうちだけど」

「は？」

てるを囲み、黒髪をなで回していた老婆たちはおおよそこの場に似つかわしくない、仏頂面の孫娘に絶句した。リーダー格の女性、千景の祖母は、パイプ椅子にもたれかかりながら、突如出現した謎の乱入者たちのために息を付き、無愛想に話を切り出す。

「あたしや千景の母方の祖母、池庄司いけのしょうじってもんだよ。つたく、礼を言うべきかどうか。あん

たの姿を見てたらうちの孫がまだマシに思えて笑うしかないわ」

「人を見た目で判断すんなし。信心と足の速さは負けてないし」

背後で千景が舌打ちする中、伊奈帆がその場を取り繕おうと会話を割り込む。

「もしかして、『踊る大念仏保存会』の方がたですか？」

「なんだいあんた学校の先生かい？ どうしてあたしらの事、知っているんだ」

「教員ではないのですが……」

この魍魎魍魎を連れて「神職です」とも言えず、伊奈帆は言葉を濁しつつ話を続ける。

「これでも私たち歴史に興味があつて。遊行寺の檀家で盆踊りのルーツを継承する活動をされている方々がいると、家族から伺いました」

こいつはまだ話が分かるヤツ、と池庄司は理解したらしい。フツと口角を上げ、小さく頷く。

「そうさ、あたしらは年に何度か、あの阿弥陀様に踊念仏を奉納する役目を担っているのさ」

広い本堂の奥には、立派な阿弥陀三尊像が金色に輝いている。彼女たちは春・秋の開山忌供養などで踊念仏を奉納するのを務めとしている檀家である。

「といっても、その様子だと今日来たのはあたしらが目的じゃないだろう？」

「実はこの三人の夏休みのレポート課題がありました。さっきまで小栗堂の寺宝を見学させてもらってきたんです」

「へえ。小栗堂で何かやってると思ったけどそういう事かい。……まあ、千景の知り合いみたいだし、嘘じゃないって事は分かった。足止めして悪かったね」

池庄司氏は色つきの老眼鏡をかけ直すと、背筋をのばして椅子に座り直す。そっけない態度だったが、これはもう帰っていいよ、という意味だろう。

「じゃあ、あたしたちはこれで……。てるちん帰ろう?」

「えー。それがしも踊ゆやく躍やくしたいのぢやが……」

意図をくんだ恵美由は、てるの袖を引っ張りその場を退散しようとする。そんなときだった。

「……何であんたたち、ケンカしてたの?」

収まり掛けた火に油を注ぐギャル（アホ）がここにいた。池庄司の眉間に、瞬時に大きな皺が復活する。

「ああ? 別にアンタにや関係ないだろうがい」

「なんだギャル、知りたいのか?」

「知りたい。うちは記憶の限り、おばあちゃんとケンカなんてしたことないもん」

「ならお前も説得しろ。このばあちゃん、私に念仏踊りさせようとしてるんだ」

「風間さんの腰が直ないんだから仕方ないだろう。お祭り当日。一日だけ務めてくれれば良  
いって言うてるじゃないの」

「だーからー！ 私には部活があるって言ってるじゃん！」

「ああもう、やだわあ。またケンカがはじまっちゃったわあ」

他の念仏保存会の奥様方もそちのけで、口論の第二ラウンドがはじまってしまった。お互い頑固で譲り合えないのはオニカゲ一族の遺伝なのだろうか。

「えーと、つまりこういう事？」

恵美由が状況を整理する。どうやら、近く踊念仏を奉納する機会があるのに高齢化で人手が足りなくなり、リーダーの池庄司は孫にピンチヒッターを頼もうとしたらしい。が、陸上部を優先する千景は猛反対している、と。状況を飲み込んだ所でこはぎがそつと耳打ちする。

（ぶっちゃけ、この場に一人中学生が混じって踊ると悪目立ちするじゃん。プライドが高いオニカゲは耐えられないってことでしょ？）

「……それ、本人に言ったら、アタシ本当に殺されるからやめてね」

（踊念仏保存会……か）

こはぎが改めて周囲を見渡すと、かなりお年を召された方々がぐったりと椅子に座り、口論が終わるのを待っている。車椅子の人もいる。踊念仏というものがどういふものなのか彼女に



は分からなかったが、ダンスなのだから、体力を使う行為なのは間違いない。

（このおばあちゃんたちは、一体、どのくらいの年月を踊りに捧げてきたんだろう……）

同時に、本当に彼女たちに来るのか？ と心配になった。

「そうだ！」

そんな時、千景が声を張り上げた。

「おい『時代遅れ（ギャル）』。だったらお前が踊れば良いんだよ！」

「は？」

突如なすりつけられた意味不明な提案に、こはぎはフリーズした。

「千景！ あんた何を言い出すんだ！」

「お前も檀家だし、信心深いんだろ？ じゃあ良かったじゃん。お前は功德を積めて、私は大会に集中できる。じゃ、あとは任せたから！」

一方的にまくしたてて話すと、オニカゲはすつくと立ち上がり、すさまじいスピードで「いろは坂」の向こうに走り去って行ってしまった……。

「エミュー、アイツ、あのまま走ってライフタウンに帰るのかな？」

「あいつなら楽勝でしょ。陸上部って大庭のトンネル越えて辻堂まで走りに行ってるらしいし。……ってのんきな考察している場合じゃないでしょ！」

恵美由が振り返ると、その場の視線はこはぎに向かつていた。

池庄司氏は、旧友の面影を微塵も見いだせない目の前の異形と対峙する。いったい、どれだけ甘やかせば、二〇年前の世界から飛び出してきたようなギャルが生まれるのだろうか。自分の孫娘は強い子に育つよう、厳しく接してきた彼女にとっては見当がつかなかった。

「……アンタ、本当に結さんの孫なんだね？ あの人の最期、何か知って……」

と、言いかけた所で、「いや、いい」と首を振った。お互い、つい二、三年前の惨状は思い出したく無いのだ。

「うち、おばあちゃんが死ぬまでお寺の、仏教の事なんて全疎興味無かった。もっと知るべきだった。……着物が残っているって事は、一緒に踊っていたの？」

「いや、あの人は御詠歌ごえいか（檀家が七五調で唱える和讃の歌。遊行寺の開山忌法要などでは、踊念仏の前に歌われている）。別の担当だったの。『足腰が弱る前に一度は踊ってみたい』とは言

ってはいたけど、本当に着物まで仕立ててくれたとはね」

「……じゃあ本当は、オニカゲの席はうちのおばあちゃんがいたかもしれない場所だ」

こはぎは、本尊の阿弥陀如来座像の前に立つ。

「……仏様の前で一体、何するつもりだい」

彼女は単調なステップを踏みながら左右に体を揺らしはじめ、手を顔の前にかざした。

「ギャル殿、それは……舞っておるのか？」

奇怪な動きは、より激しさを強める。くると手首を回したり、両手を四方八方に広げたり。左右に揺れる体の中で、単調な腕の動作をひたすらリピートする、そんな振り付け。

一体我々は何を見せつけられているんだ？ と困惑する老人たちの中、恵美由はその行為が何か。割と良く知っていた。

『バラバラ』だ……！

コロナが猛威を振るった二〇二〇年頃、緊急事態宣言下、音楽会社が室内で楽しめるダンスとして、かつて流行したその踊りを動画配信サイトで無料公開した。結果、巣こもりで外出の出来ないZ世代の若者の間でプチブームになったのだ。……とはいえ、何故今踊るのか。全く

理解できない。

（やめろおはぎ！ 罰当たり以前に恥ずかしいからヤメテ!!）

仏様も、人も、ゾンビも。無音のユーロビートにしばらくみんな呆気にと取られていたが、演奏が終わったのか、ぴたっとこはぎの動きが止まった。

「……」

色即是空・空即是色。つまりは無の時間である。蟬の声のみが遠くに響く本堂で、彼女は一人、阿弥陀様に向かって呟いた。

「——うち、踊れるよ?」

（つづく）

続きは製品版でお楽しみ  
ください。

